

ニホンザル研究林

研究林実行委員会

1. 下北研究林

下北半島北西部のニホンザル生息地では、例年の通り、主として冬季の観察条件の良い時期に、群れの遊動の継続追跡観察を行った。

西南部に生息する群れに関しては、分裂後の経過を追うとともに、餌づけ群の生態管理に必要な基礎調査を行ってきた。

尚、下北のニホンザルについての次のような報文を足澤が著した。

足澤貞成(1981): 雪山にサルを追う, “下北のサル”(伊澤松生編著), どうぶつ社, 東京。

2. 上信越研究林

雑魚川流域の冬の調査, 横湯川流域の seed trap による果実生産量及び植生調査が 1979 年にひきつづき行われた。

志賀C群では群れ構成の確認, 食物種について秋に重点を置いて調査が行われた。

志賀B₂群は春, 部落に出没して畑, 店を荒らした。その問題について地元側と協議し, 群れを山に追い返す方法などについて話し合いをした。

3. 木曽研究林(候補地)

55年度には, 共同研究員と協力し, ひきつづき群れの遊動について追跡調査を行った。しかし主要な努力は, この地区でおこっている猿害を阻止し, サルを広大な国有林に追い戻すことに払われた。全国にわたり頻発している猿害問題の解決が, ニホンザルの保全につながるからであると同時に, この地区での研究を安心して行えるようにする必要もあるからである。

木曽研究林には 56 年度から国費が認められたので, 研究の基地となる小舎の建設とともに, いよいよ野生群の個体識別下での長期トレースに向けて, 一步をふみ出すことになる。

4. 屋久島研究林(候補地)

55年度の調査活動は主として共同利用研究によってすすめられ, 研究林予定地での長期集中調査が行われた。研究目的としては, 自然群での社会学・生態学をおしすすめることにあるが, 今年度はとくに具体的な社会関係まで調べることができた(共同利用研究: ヤクザル地域個体群の社会機構について — の項参照)。56年度はこれに加

え, 従来からいわれている暖帯林とその上部の温帯林との間での群れの生態学的差異と両者の間の群間関係を明らかにすることを目標としている。

他方, これまでの研究の成果も, 丸橋らを中心に逐次公表され, 業績があがってきており, 研究林化への機はすでに熟しているといえる。

大学院学生

昭和 55 年度における京都大学理学研究科動物学専攻霊長類分科の学生, 指導教官および研究テーマは次のとおりである。

氏名	学年	指導教官	研究テーマ
丸橋珠樹	D3	河合 雅雄	ヤクザルの社会生態学的研究
森山昭彦	D3	高橋 健治	霊長類のタンパク分解酵素の性状の研究
伊藤真一	D3	久保田 競	注意発現の神経機構の研究
川本 芳	D3	野澤 謙	遺伝的変異よりみた霊長類の系統に関する研究
小島哲也	D3	室伏 靖子	ニホンザルの個体認知行動の実験的分析
松本 真	D3	江原 昭善	霊長類の顎・顔面頭蓋の形態学的研究
川合恭子	D2	近藤 四郎	霊長類足骨に関する形態学的研究
船橋新太郎	D2	久保田 競	スキルネスの神経機構の研究
藤田和生	D2	室伏 靖子	ニホンザルの概念学習に関する実験的研究
今井一郎	D1	田中 二郎	沖縄県西表島における狩猟・魚撈, 採集
浜田 稜	D1	近藤 四郎	ニホンザルおよびその他のマカクの形態研究
星野二郎	D1	河合 雅雄	ニホンザルの群

			おけるオトナオスの役割	幸田正典 M1	河合 雅雄	旧世界ザル・新世界ザル25種の母子関係の比較行動的研究。
鹿野一厚 M2	田中 二郎	小笠原野生化ヤギの社会生態学的研究				
宮藤浩子 M2	河合 雅雄	ニホンザル自然群におけるメス離脱による分裂群の形成過程に関する研究	名取真人 M1	江原 昭善		リスザルの臼歯の個体変異について。
ジャン・バルセロ M2	河合 雅雄	ニホンザルの顔の表情の研究	今井一郎 (1980) ::	八重山群島西表島におけるイノシシ獺の生態人類学的研究。民族研究 vol 45 1-31		